

(實驗眼科雜誌第 198 號 = 發表セリ)

2. 翼狀贅片ノ統計的觀察(中央眼科醫報第 29 卷第 10 號 = 發表セリ)
3. 綠膿菌 = 因ル角膜潰瘍ノ 1 例 = 就テ (實驗眼科雜誌第 163 號 = 發表セリ)
4. 球結膜下 = 發生セシ硬性纖維腫 (實驗眼科雜誌第 173 號 = 發表セリ)
5. 家族性翼狀贅片ノ 1 例 = 就テ (實驗眼科雜誌第 153 號 = 發表ス)
6. 腦底後交通動脈瘤 = 因ル左側動眼神經麻痺 (箕越中共著) (追テ日本眼科學會雜誌 = 發表ノ豫定)

太田徳次郎君

主論文

太陽光線ノ死體分解 = 及ボス影響 (本誌第 50 年第 9 號 = 發表セリ)

參考論文

1. Trichlorbutylalkohol(Chloreton)ノ動物體內ニ於ケル運命 = 就テ (本誌第 47 年第 11 號 = 發表セリ)
2. 實驗的日本住血吸蟲病家兎ニ於ケル窒素新陳代謝ニ關スル研究 (西崎武亥一共著) (本誌第 48 年第 3 號 = 發表セリ)
3. 早流産ニ於ケル Zondek-Achheim 氏妊娠診斷法ノ範圍(本誌第 47 年第 11 號 = 發表セリ)
4. 月經週期ノ基礎新陳代謝 = 及ボス影響 (臨牀産科婦人科第 8 卷第 2 號 = 發表セリ)
5. 各種赤血球沈降速度測定法ノ比較並ニ沈降速度ノ外因的條件 = 就テ (グレンツグピート第 4 年第 1 號 = 發表セリ)
6. 赤血球沈降ノ寫真的觀察 (ゼヂグラフ) = 就テ (臨牀産科婦人科第 4 卷第 4 號 = 發表セリ)
7. ブツキー氏「グレンツストラーレン」ヲ以テセル潰瘍療法 = 就テ (グレンツグピート第 4 年第 2 號 = 發表セリ)

滿支旅日記 (上)

畑 文平

滿洲事變も支那事變も、吾國としては堪忍袋の緒が切れて謂はば止むに止まれず立ち上つた正義の戦であつたが不幸が反つて幸となつて吾が國が東洋の盟主として實現せねばならぬ運命である所の大政略、即ち 4 億の民衆の幸福の爲めに、5 族協和を礎として建設せらる可き王道樂土の理想が早くも具現せらるることとなつたのである。長期抗日を叫ぶ逆賊討伐の銃聲の消ゆるまもなく長期建設の鑿の音が丁々として響いて居る。

大陸に於ける建設の模様は如何に、民衆惠澤の第一線たる醫療救治の状態は如何、惡疫傳染病の豫防状態は如何、而して吾が忠勇將士の現地活躍の状況は如何に、醫師の就職需要關係は如何に、これが吾人に與へられたる大陸視察の使命であつた。併しながら政治的軍事的の第一線である滿洲國及び支那殊に其の邊境に到つて其の實相を極めこれを報導する事は軍の機密上に許されざる所妙く無い、加ふるに吾々の淺薄なる觀察は之に更に災して豊富なる收穫と號して諸君の上に賣らし得る所のあまりにも妙きは慙愧の次第であるが、只茲には旅日記として僅かの見聞を記し責任の一部を果したひと思ふ所以である。

10 月 17 日 (神嘗祭) (岡山より下關へ)

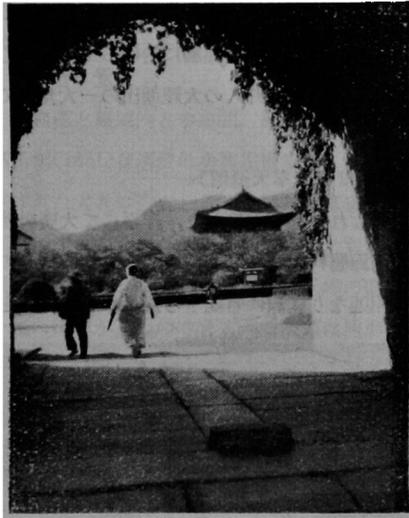
知人多數の見送りを受けて岡山驛を午後 1 時 45 分の急行で出發した、極めて上天氣の秋日和でこんな日が旅行中 1 日の雨も無く續いたのは幸運であつた。午後 5 時廣島に着き、驛迄來られた田丸博士父娘、箕越君夫妻と話す機會を得た。9 時下關着、慌ただしくも關釜連絡船興安丸に乗り込む、6000 噸許りの新造船で寢臺の乗心地も汽車のと同様、大した動揺も無く夢の中に海峡を渡つた。

10 月 18 日 (釜山より京城へ)

6 時少し前に起された、船は已に釜山の棧橋に横付けとなり茜色の空から朝風が清々しく吹き込

んで居た。釜山からは「あかつき」とか、「ひかり」とか、「のぞみ」とか煙草の名前の様な連絡急行列車が京城奉天新京若くは北京方面へ出て居る。

7時迄に出た「あかつき」の車窓から見た半島の秋は大陸的の落付きを見せて耕地は見渡す限り一面に黄色に稲實り山は植林された小松が緑に繁つて吾が半島開發の成功を示して居る。午後2時京城に着く白衣同胞の首都、曾遊の地であるが6年前に見た時に比して著しく街の面目も改まり地域も擴大され、吾が大陸躍進の第一前進根據地たるの貫録を示して居る。



京城景福宮苑

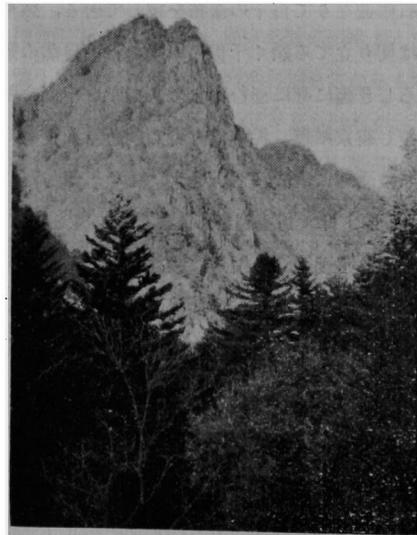
同行田部氏と遊覽バスの客となり、徳壽宮、景福宮、慶會樓、昌慶苑、經學院、博文寺等の名所を見てから南山上の朝鮮神宮に詣ずる、老松繁れる丘を負ひ西に面して鎮座まします總繪造の大神、畏くも天照皇大神と明治大帝とを祀る眞に半島の鎮護にして内地人は言ふに及ばず半島同胞の參詣するものひきも切らず、本事變に際して彼等が示したる忠君愛國の發露と相照らして誠に感深きを覚えしめたのである。夕、先帝城大眼科教授の早野氏を訪問、夜半迄歡談し、新設の「半島ホテル」に宿する、岡山の富豪野口氏の經營する所支配人山本氏も亦備前出身である。

10月19日(京城より金剛山へ)

京城に於ける醫育其の他の機關は曾遊の際視察したので今回は劍愛し1日を名勝金剛の探勝に費すことにして、8時京城驛を立ち城津行の汽車で鐵源に至り、電車で斷髮嶺の險を超え、約6時間餘りを費やして金剛山麓の驛に達した。

金剛山は朝鮮の東海岸に沿ひて南北に走る脊梁山脈の一部で、山高く形容の奇なると、豁深く水流の凡ならざるに依つて其の名天下に名高いが、内外兩金剛の全部を探るには健脚を以てして猶ほ數日を要するので、予等は旅程の關係上只1泊の前夜を利用し内金剛の代表的景觀を翻たに過ぎない、夫れでも内地に一寸其の比を見ない秀麗の山容水姿に親しむ事が出來た。

山麓の旅舎鐵道局經營の金剛山莊を出て溪岸に沿ひ上ること數町にして、已に長安寺畔の幽邃なる仙境に達する。左右は見上げる許りの高い峯眉に逼り、全山緑一色の巨大なる唐松密生し、溪岸に逼れる所に丹青已に舊びたる古刹長安寺がある。全土しめじ茸の様な民家と「ボアラ」の疎林のみと見ゆる様な半島の山影に、こんな仙境が隠れて居るとは接して初めて意外の翻に打たれた次第である。豁谷の左岸を右へ支流に沿ひて上ると、



朝鮮金剛山の紅葉と翠松

紅紫とりどりの「もみぢ」の下影、玉の様な水のせせらぎ、10町許りにして明鏡臺に達する。あたりの風景は屏風にかかれた山水畫其の儘であり、造化の神の手腕に驚ろく許りである。山の靈氣を肺臟一ぱい吸ひ込んで冷氣通る山莊に歸宿する。

10月20日(金剛山より京城へ)

早朝宿を出て金剛登山道を本流に沿ひて深く遡る。谷に横たはる巨巖怪石は青緑にして瑪瑙の如き色澤あり、之に當つて碎くる清流は玉散る水晶の如くである、鳴淵潭、近仙橋、三佛巖の奇勝を経て山中の巨刹表訓寺に達する。此の附近到る所溪中の巨巖一面に鮮人の姓名が何れも美しく楷書の筆蹟を以て深く彫刻されて居る。初めは旅人の戯れと思つたが、寺院の境内何處にも墓石無き事と、文字の何れも眞面目なる點より、これは鮮人が墓石代りに溪流中の自然巨石に故人の名を刻むものと判じた。一般に石に乏しき朝鮮に於て斯かる勝景の内に永久に自己の墓石を残すとは眞に賢明な策である。時に邦人の旅行者が墨汁や白墨にて名を書き散らしたのを見たが、これは心なき旅人の戯れで自然と神佛とを冒瀆した行爲である。心すべきである。内金剛の中心とも思はる2個の溪流の合流する所、萬瀑洞と云ふ、名の如く巨石相連なりて百千の瀑布を爲して居る、然も兩岸は切り立てる如く千仞の峯である、自然の靈氣恐ろしき迄に身に沁む絶景であつた。午後金剛驛を發し夜京城着、鈴木氏と合し同行3人夜9時半京城發滿洲に向ふ。

10月21日(國境超えて奉天へ)

午前6時鴨綠江を渡る。滿鮮を連ぬる長橋を過ぐれば安東である、茲で簡単な税關検査がある。南滿の平原は秋已に深く、山野全く黄褐色に草枯れ、點在する「ポプラ」楊柳が黄色い葉を振るつて居るだけである。沿線に見る農民の姿が國境の大河を境として朝鮮では白衣なるに滿洲領にて急に淺黄一色となり、藁葺小屋が煉瓦建となるも國情とは云へ不思議の感が起る。田畑を馳け廻る黒豚

の群れ驢馬の尻に乗り行く滿人の姿、茲に已に悠久なる大陸の氣分が逼つて居る。

午後1時奉天に着す。滿洲醫大の松井學長、橋本教授、戸田教授、撫順醫院の平井出氏等迎えらる。「奉ビルホテル」に宿泊する。

奉天市は今人口70餘萬、就中邦人16萬人に及ぶ眞に滿洲國第一の大都である。昭和12年12月治外法權の撤廢、滿鐵附屬地行政權の移讓により附屬地、商埠地、城内、工業地區の區別が廢され、大和區、瀋陽區、鐵西區、其の他に統一された。殊に鐵西區は昭和10年創設されたもので、鐵道西側400餘萬坪の地域に内地一流會社が180有餘の工場を創設し、正に滿洲國に於ける工業の中心を形成したるは眞に邦人の大陸進出の一大見本である。

10月22日(奉天逗留)

快晴なれ共朝霧が冷たひ、洋車にて大廣場傍にある滿洲醫科大學を訪問する。4階建赤煉瓦の大建築相連なり滿洲に君臨する最高學府の偉容を誇



奉天「ヤマトホテル」前廣場

つて居る。附屬醫院の診察室に助教授の佐々木博士を訪ねる、主任船石教授は今北支視察に旅行中との事。佐々木氏の計らいで醫局長高尾佐明君の案内にて、奉天國立博物館を參觀、正午には眼科教室員の6氏と「ヤマトホテル」に招待を受け、午後は亦佐々木氏其の他の案内にて同善堂及び英國系の奉天醫科大學の參觀をすることを得た。

國立博物館 奉天に於て見る可きものの1つで

ある、三經路にあり、舊東北軍閥の巨頭熱河の飛將軍たりし湯玉麟の私邸跡で、廣き庭園の中に、獨逸技師の設計に依る白堊の3層樓が聳立して居る。未だ完成に至らなかつた中に事變となり、敵産として全部政府に沒收されたが、其の内容は熱河の離宮、喇嘛大寺等に秘藏されて居た周漢時代の銅器、刻絲、刺繡、遼、宋、金、清時代の陶磁器、名畫、墓誌、佛像等總計3500點に及ぶもの湯玉麟が奉天に搬出して隠匿して置いたのが、共に沒收されて此の私邸に陳列して博物館とせるものである。熱河の承德に行つても茲にある何分の一も残つて居ない。即ち熱河の財寶は北京方面に移された外は概ね茲に於て見ることが出来ること云はれる。

同善堂

大和區と舊城内との中間、高臺廟西にある。光緒7年(1881)日清役の勇將左賈貴後に左忠莊公と呼ばれた大人の設立した一大社會救濟事業團である。砂埃りの蒙々たる支那街を行くと支那特有の黒暗色の煉瓦塀にかこまれた、數千坪の構内に數十棟の建築が連なつて居る。救濟部は流浪者、行路病人、貧困者、不具廢疾者、老衰孤獨者、誘拐されし婦人、自由廢業の藝妓等を救濟收容し、育兒部にては養育者無き兒童、迷兒、乞食、遺兒、捨兒等を收容し、更に授業部にては收容者に對し木工、印刷、縫工、毛氈織其の他の技術を教へ、1人前の工手に仕上げ、社會に送り出すのである。其の他各科を具備せる病院と理想的の育兒所とあり、滿人の社會事業として出色のものであるが所長谷竹次郎氏親切に案内さる。茲には同行案内役たる眼科教室佐々木氏方の副手たりし崔氏が働いて居た。茲で最も珍らしい設備は捨子拾ひ上げ器のあることである。道路に面せる隔壁の一部が門形に作りあり救生門と扁額がかかつて居るが、實際の出入は出来ない。只中央部4尺位の高さに幅高共1尺5寸位の小窓が開ひて居り、これが街上から捨子を受る口である。衣類に包んだ子供を乗せると、臺秤の様な仕掛で臺が一寸下がると、電

線の廻路に電流が通ずる様になつて居り、番人小屋の電鈴が鳴る、即ち親には會はず拾ひ上げ、親は闇い街上から密かに我子の幸福を祈りつつ去ると云ふ譯である、拾はれた子供は育兒部で成長し、一定の手職を得て社會に出ることになる。

奉天醫科大學

城外の東南側小河沿一名万泉河と云ふ湖水の北側にある、英國系の醫學校で、最近迄小河沿醫學專門學校と呼ばれたが、滿洲國の學制改革で醫科大學となつた。此の外には同様に新京及び哈爾濱に國立醫科大學が出来たが、名前だけで實際は未だ醫專であり、中學校卒業生を收容する。本校は附屬醫院は57年、學校は27年の歴史を誇ると云ふ。基礎醫學教室は僅かに3階建の建物1棟中に收められて居るが、學生20名收容する様總べてが整のえられ、小さい乍らも各室の設備、標本等醫專としては立派なものであつた。構内は2萬坪もあるそうだが附屬醫院は中々廣く、清潔で「ミツシヨ」の關係士男と女は診察所も入院室も全く別の所にあつた。

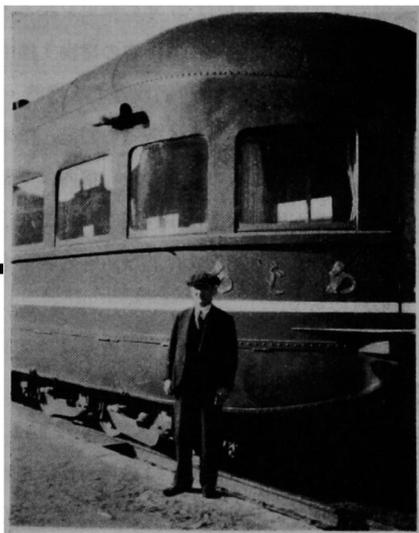
設立者はクリスター夫妻、今の校長はエラリツク氏、教務主事が唯一の日本人今村茂一氏で、他は英國人及び支那人の教授16人居り、學生は150人で女學生も30人あると云ふ。茲の自慢は生物學教授秦囉底氏で、滿洲に於ける蚊の研究者としては第1人者で、當日も政府から盛京賞なるものを授與されるので出廳中にて留守であつたが、蚊の標本だけは見せて呉れた。眼科主任の陳某には一寸會つた許りだが日本語を話さず、眼科診察室を參觀したが、視力表の色々種類があつちこつちかかつて居る外に、別に變つたものも無かつた、只暗室内にグルストラント氏の大顯微鏡、角膜顯微鏡、ジャバル・シエツ氏角膜亂視計の備はつて居たのは案外であり亦暗室の眼底検査を横臥しながら出来る様「ベット」の備付のあつたのは思ひ付きであると思つた。

奉天の見る可き所として奉天神社、忠靈塔の參

拜は29日に再来して、恰度廣東漢口陷落祝賀式のある日に行つた、其の他北大營、北陵等は昭和7年來奉の際見たので今回は割愛した。夜は橋本氏と亦レントゲン講義の歸め來奉中の東大中泉正徳教授と3人で「ヤマトホテルグリル」で會談した。

10月23日(奉天より新京へ)

午前6時起床荷物を纏め7時半發の新京行「のぞみ」に乗る、滿大眼科の高尾氏旁々驛迄送つて来て呉れた。相變らず見渡す限り漠々たる灰色の中滿廣原を南北に貫ぬく2本の銀線、列車は4時間を費やし、早くも午前11時40分滿洲國首都新



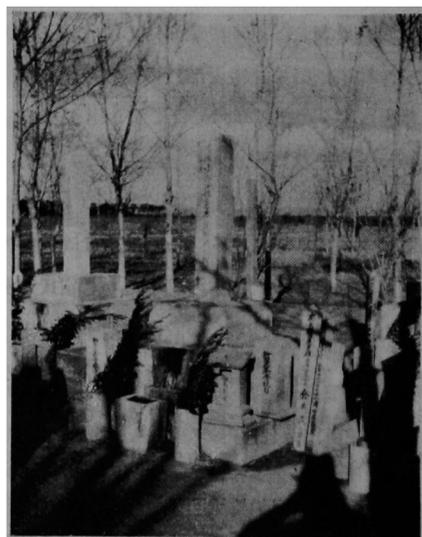
特急「アジア」と筆者

京驛に滑り込んだ。驛頭には前からの通知に依り興安病院長吉田秀雄氏(岡山醫專出身)、国立衛生技術廠技正淺田順一氏等出迎えらる。「ヤマトホテル」は滿員なので2流の「大都ホテル」と云ふ驛廣場東側の旅館に荷を降す。午後は鈴木、田部、吉田、淺田氏等と東洋第1と稱する40人乗の「大バス」にて新京の「 Rundfahrt」を試みた。

新京は昭和7年3月9日、3千萬民衆が無限の樂土とする新興滿洲國の首都として名を長春から新京と改めたもので、昭和9年執政溥儀氏滿洲國皇帝の位につかれ康徳と改元し、茲に新帝國首府

人口150萬を理想として大都市計畫が企てられ、以來着々として建設事業が進展し、今驚嘆すべき全貌を現出して居る。全體200平方kmの長方多角形の大平野に、幅員最大60mに及ぶ3線式の大路を四通八達せしめ、此の間に整然たる官廳街、商店街、工場街、住宅街、公園地帯を設け、機構新設にして市街は舊長春の部を除き舊物無き點既存都市と全く異なり、「ユートピア」の感がある。地域は倫敦より大、大東京に亞ぐものと稱され、今人口30萬就中邦人8萬人に達し年々の増加率も驚ろく可きものと云ふ。

「遊覽バス」は新京驛前を出て、新京神社、關東軍司令部前から忠靈塔に至り參拜、西公園より市の北郊寛城子の戦跡、引返して東廣場、宮内府、清真寺の回教寺院、大同廣場より市を縦貫する大道路を経て、市南郊の南嶺古戰場に倉本大尉以下の英靈を弔し、更に市の西部國務院、順天廣場等を廻つて市の中心なる寶山と云ふ百貨店に到着し車を下りた。この巡回中「バスガール」の説明極めて巧にして、殊に寛城子及び南嶺に於ける現地に立ちて滿洲事變勃發當時に於ける皇軍の奮戰激闘の模様を語るに極めて上手、宛ら激戦を眼前に見



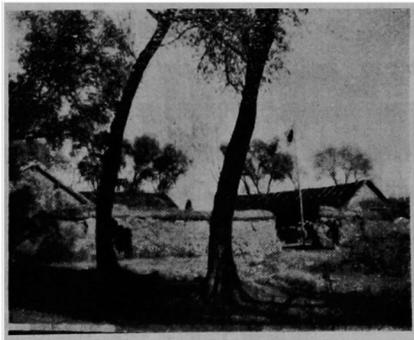
新京郊外南嶺古戰場
(倉本少佐墓所)

るが如く殉忠將兵の最後を序するや、一行をして皆落然と涕淚せしめたるには感服した。

夜は吉田、淺田氏に加ふるに沖津亘氏、折島整氏等の舊い岡山醫同窓諸氏と中央飯店に會談する。9時「ホテル」に歸宿せる後更に支那浴場血葦池、歡樂郷、雙王班、西群仙等を視察する。

10月24日（新京より哈爾濱へ）

吉田氏の紹介にて新京郊外にある移民村なる新京力行村を視察に行く。吉林街道を行くこと3里許り、街道に沿ひ一部落を爲す。古い滿人の家屋を利用せる村役場に事務管掌の田中靜壹氏を訪問し、狀勢を訊くに、この村は先年新京の南郊に開村したのであるが、失敗し其の際蔬菜作りの經驗



新京郊外の移民村本部

から今は野菜のみ作り新京に出荷するもので、30家族150人許り、熊本縣人を主として他に各縣人も來て居る。新築中の模範農家等を視察し大に發展を祈つて別を告げた。

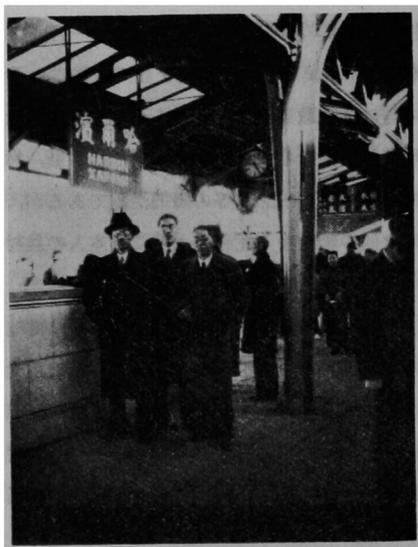
滿洲に於ける移民は滿洲事變後滿蒙に對する我が生命線永遠に安泰ならしむる爲めの具體的方策の1つとして、亦5族協和の實を擧げて東洋平和の確立を世界人類の福祉増進に貢獻せんとする崇高なる使命の下に、拓務省が卒先指導計畫して行はれつつあるものである。初め試験移民として昭和7年より4回に涉り1800名を送り、樺川縣、依蘭縣、綏化縣、密山縣等に配分入植したが成功の確信を得て更に大規模の集團移民計畫を立て、昭和11年第5次1千人を入植し、更に昭和12年

度より向20年間に滿洲國全人口の1割たる500萬人、100萬戸の移住計畫を立てて居る。全人口の殆どは殖民政策上何うしても必要であると云ふ、現在迄の主なる入植地は牡丹江、佳木斯、林口一密山、哈爾濱—黑河等の鐵道沿線であるが、將來順次他の豐沃なる北滿の天地に日本人の農村郡邑が多く發達するであらう。

是等の集團移民地方は初めの計畫では實地踏査する豫定であつたが治安其の他の關係で割愛の餘儀なき次第となつた。當地の諸君の意見を綜合すると、内地に於ける人士の滿洲國に對する實際を認識して貰ひ度き爲め、多數の視察團の派遣を希望する、學生等も夏期休にでも滿洲に來り逗留し、働きたら滿洲の研究をして貰ひ度い、滞在費位は先輩の間で何うにもなると云ふ。内地の醫師が來つて直ちに開業することは、諸物價高殊に住宅拂底高價なると言葉不通の關係で、容易では無いが、數年間公の病院、研究所でも働き、様子がわかつてから開業すれば可である。奉職口としては滿鐵其の他の衛生、防疫、診療方面が人を多く有し、卒業當座の者でも月380圓位迄にはなると云ふ。然し臨牀醫よりも衛生技術官的の人の活躍望ましく將來新人の就職上にも大に便宜となると云ふ。

午後興安病院に吉田氏を訪ね、茲で昨年卒業の小笠原軍醫中尉と會し、案内にて軍醫部に舊友下山中佐を訪問し、直ちに驛に赴いて午後5時38分發の「あじあ」にて哈爾濱に向ふ。

列車「あじあ」は大連哈爾濱間を繋ぐ最大最急且最美列車で東洋一と稱するものである。2等車でも内地の一等位の價値はあり、速力大に係はらず振動極めて少く音響も妙い。双城驛にて日暮れ、厳しく武装せる6人の列車警乗日本兵乗車す。9時半哈爾濱驛に着、「プラットホーム」に鐵柵を以て圍まれた伊藤公遺難紀念碑に類づき、鈴木君等の關係もあり、岡山出身者及び九大出身者の一群に依り出迎られ驛前の「大和ホテル」に入



哈爾濱驛の同窓會員

る。10月の下旬なるに寒氣相當に身に沁み冬外套の襟を立て初冬の感がある。

10月25日(哈爾濱滞在)

哈爾濱は今人口50萬、北滿洲の政治經濟文化の中心である、以前から東洋の巴里として特殊の異國情緒を持つ國際都市として興味を持たれて居る街である。哈爾濱は露國の建設以來30餘年の歴史を有するが歴史的に支配勢力興亡を3期に分け得る。最初の10年、即ち大正6年露西亞革命迄は全く露人の天下で、日支人等一指も染め得なかつたが、露西亞革命後露の権力漸次地に落ち、支那側は此の機に乗じて鐵道利權の回收、其の他政權を奪回して舊東三省政權の華かな時代を迎へ、支那人の天下を稱したが、滿洲事變後一變して東支鐵道讓渡、滿洲國成立以後、日滿人否日本人の天下になつた。今事實上哈爾濱の實權を握る者は他の都市に於けると同じく日系官吏であり、一般日本人も露支其の他の國人を後目に見下して發展して居る有様である。全滿に於けると同じく人工100萬を目ざして大哈爾濱の建設過程にあり、筈々として成功の頂に導かれて居る。今人口50萬人中、日本人4萬人、白系露人3萬人、滿人

39萬人、蘇人6,500人在住すると云ふ。

驛前から東方地區一帯は山手地區で、新市街と稱し、道路廣く並木、構内樹木多く、露西亞式の大樓、諸官廳立ち並び、頗る北歐の街の氣分が濃い。驛近くにある「ヤマトホテル」は露西亞時代の建物で頗る靜かな氣分の落付いた好旅館であつた。「ホテル」で午前休養し午後來訪せる高橋氏に案内されて、埠頭區の繁華街、舊露人の中心地たる「キタイスカヤ街」を視察する、寶石、毛皮商の軒を並べたる舊露西亞街の、横文字の看板の間に片假名の大看板を出し、日本旅人の氣を引いてるのも微笑ましい感じがする。露西亞全盛時代には邦人等は車道も歩めず、歩道も行けず、僅に中間の小溝の上を競々として歩み得るに過ぎなかつたと云ふ。夢の様な時代の變遷である。「キタイスカヤ街」の北端が松花江の岸である、滿々たる水をたたえ、外輪の河川汽船が浮んで居る。對岸の別莊地帯たる大陽島も指呼の間に見える。緯度の關係で茲では已に太陽が著しく南を廻り、低いので光線が弱く、午後2時頃に既に夕の様な感じがし、黄葉した街路樹が盛に吹き落ちて旅愁を覚えしめた。夜岡山の同窓會員光武順一、小池藤太郎、佐藤靜馬、田村勇及び松田貞一氏等に招かれて「ホテル モデルン」に露西亞料理を賞し、虹街の「キャバレー ファンタジー」を視察異國情緒を味はつた。此夜田部君は夜行で奉天に先行した。

10月26日(哈爾濱滞在)

去23日奉天にて廣東攻略の快報を聞いたのに、今日は早くも漢口攻略の報に接す。午前9時驛前より出る市内「遊覽バス」の客となる。鈴木氏同行、市の一般に通ずるのはこれが一番手早い、市の南東郊外に建設された忠靈塔は5角の高塔で高さ事滿洲第一であらう。滿洲事變の犠牲者英靈の永久に睡る塔の上では、銀翼を旭光に輝せながら2機の戦闘機が木葉の舞ふが如く攻防演習の秘術を盡くし戦友の魂を慰め居るかの如く思はれた、塔の南方には疎林に團まれて日露の役の烈士、横川、

沖兩氏を初め脇、中山、田村、松崎、小林、向後等の殉忠諸氏の碑が立つて居り永へに北滿の鎮護と仰がれた。

建築の美はしき孔子廟、極樂寺、露西亞人の墓地、塵埃面を向け得ざる尙家傳の滿人街を通覽して遊覽は終つた。午後小池氏に伴はれて市公署を訪れ、其の係員の案内で市の衛生施設たる汚穢處理所、阿片の戒煙所等を見學す。亞片吸引に依る國民健康の破壊と貧窮に依る罪惡の溫床となるを患えた滿洲國では阿片の吸引を禁じ、新京を始め諸都市諸地方に其の治療所たる戒煙所を設け、救済に當つて居るが茲も其の一つである。



「モルヒネ」中毒患者

哈爾濱戒煙所

所長醫師脇岡彦三氏の語に依れば、本所の收容數は定員 130 名なるも、哈爾濱市内でも阿片癮者 5 萬も存する現状では、到底全部の求に應じ得ず、今 250 名收容設備に擴張中である。患者には私費と公費とあり、入所勧誘に依る希望者に許す限り入院させて居る。

入院當時の症状は、一般に瘦せて顔面蒼白、無氣力であり、中には禁斷症状として狂暴癲狀を呈す者もある。入院の際これを最後と餘計に吸収するので咽頭加答兒を起して居る者が多い。膝蓋腔反射亢進し、瞳孔は縮少する事稀である。體温も下降しないが、禁斷症状として猶ほ頭痛、腹痛、上肢、下肢の神經痛を訴へる、患者の日常吸引量は量で定められないが 10g 以上價格 20 圓以上に達

するものがあると、但し平均量でも 6,70 錢である。

患者の治療法は麻藥漸減療法で 0.5% の「ヘロイン」を用ひ、患者の既往吸煙、乃至注射せる期間、量及び症状を考慮して注射量を決定し、漸次減量して概ね 10 日間にて目的を達する、其の他補助的に「ロヂノンカルシウム」、「灰度カルシウム」、「ブロームカルシウム」等の注射を行ふ、入院期間も多く 30 日—1 箇月半にして概ね健康恢復し、顔色も善く肥滿して來る。有料入院室には白系露人の室、日本人の室、滿人の室等分たれ、多く恢復期患者が居た。別棟の官費患者室は皆滿員であつた、匪賊捕虜のみを收容せる部屋があり、10 人許り居たが悍悍な顔貌をして居た、匪賊には結核患者が非常に尠いと云ふ。

10 月 27 日 (哈爾濱滞在)

午後小池氏及び鈴木氏と哈爾濱市立病院を訪問する。院長は民生所長豫備軍醫中佐の植村秀一氏で茲で哈爾濱の市勢都市計畫衛生状態の話聞く。別室でカシン・ベツク病患者を見、中西醫學士の話を読み、亦病院内を參觀す、病院は可なり狹隘であり清潔でも無いが患者多く廊下迄溢れ、頗る活況を呈して居る、今北隣に五壯なる新病棟を建設中であつた。次で構内を異にする新設哈爾濱醫科大學の病理學教室に正山勝教授を訪問し克山病の原因及び病理につき聴く、これに就ては別所に詳記した。日暮て歸宿夜は「ホテルニウハルピン」に家原陸軍病院長、尾形少佐、西村大尉、小池、高橋、佐藤、田村諸氏の和式招宴あり歡を盡くした。

10 月 28 日 (哈爾濱より再び新京へ)

前 8 時再びアジアの客となり、新京に向け出發す。双城保驛は支那御殿風極彩色、高峯もあり、美術館の如く田舎に措しい驛である。午後 1 時 40 分着、再び吉田、淺田及び小笠原君等出迎らる。軍人會館に荷物を收め國立衛生技術廠を訪問する。

滿洲國々立衛生技術廠は滿洲の傳研である。新京の興安大路の北の端れにあり未だ創業間も無い

状態で規模はあまり大きくは無い、校正の淺田順一氏の研究室にて種々の滿洲國の傳染病及び寄生蟲に就て訊く事を得た。傳染病としては「滿洲チブス」、「ベスト」、「コレラ」等があり、寄生蟲病としては「肺ヂストマ」、「肝臟ヂストマ」、絛蟲病、腎蟲等が主なるもの、特殊疾患としては、克山病、カシン・ベツク氏病、「カラザール病」等がある。

茲で見た興味ある標本として擧ぐる可きは、内蒙から滿洲國籍に朝鮮にも見らるる牛の結膜嚢に寄生する牛眼線蟲(Therazia rhodesi)なるものがある、氏が助手に命じて牛眼から生きた蟲を採集し、水に游がして供覽されたが、長約2cm許りの一見白髪短毛を見る様な白色圓蟲で、雌は雄よりも稍々長い、蠢動運動を行ひつつ1眼に數10匹も寄生すると云ふ、刺戟の爲め「結膜カタル」を起す。

ザリガニと云ふエビとカニの中間の如き長さ10—15cm許り、灰黒色の兩棲類が流水中に飼養してあつた、これは「肺臟ヂストマ」の中間宿主であり、支那モズリガニと共に滿人これを好んで食する故に「肺臟ヂストマ」多いと云ふ。猶ほ小豆色小豆大の丸蟲と稱する小さな甲蟲が居た、これを生で食へば不老長壽若返りの効ありと稱せられ、滿洲の大官連の愛用の爲め需用少くないが、淺田氏の研究では、此蟲は「ナナ絛蟲」、縮絛蟲等の中間宿主として、體內發育に極めて好適すとは皮肉である。標本中に尙ほ腎蟲があつた、巨大なる蛔蟲に似たる圓蟲で家畜若くは人の腎臟内に寄生し、内容を全く喰盡して空虛嚢状と爲し、茲に復息するのである、時に腸内に寄生するものもあると。

猶ほ序に茲に滿洲國に於ける特殊病に就て略記する。

克山病 (正山教授に據る)

克山病とは哈爾濱の北方龍江省克山縣地方に於て初めて起つた地方病で、主に冬期12月より2月頃の候に見られる、病症は急激なる心臟狹窄症状を起して屢々頓死するものである。健康者が引

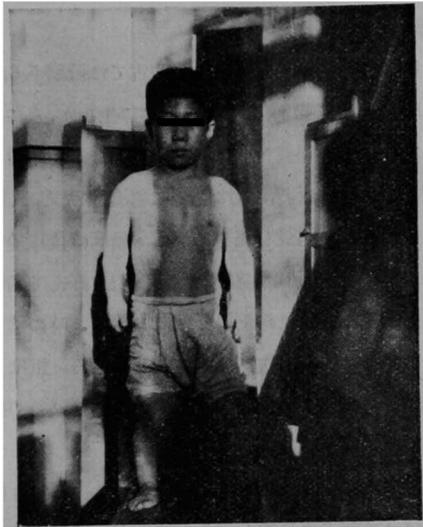
續いて急死するので守備兵等に「ベスト」と疑はれ恐れられたと云ふ。一般に中年の女子に多く、男子及び子供には稀に見られる、密閉せる部屋に睡眠中とか、小用に行き戻つた跡とか、飲酒の後とか、何かの誘因に續發する。冬期殊に密閉室内等に於て頻發したので原因として瓦斯中毒、殊に一酸化炭素の中毒死の疑が置かれたが、併し或る地方的に限られて起ること、女子にのみ多い事などから、單に暖房の不備に依る一酸化炭素中毒では説明出来ない。本病の病理解剖としては心臟の内膜及び筋層に非細菌性の炎症及び續發變性を見るのみで他に冠狀動脈は勿論他の血管臟器には特に病變が見られぬものと云ふ。

哈爾濱醫大教授正山勝氏は、病屍を檢查せる際其の數人が何れも赤き口紅をつけ居つた點から、紅の毒に非ずやと疑を起し、克山地方の商店から赤色々素口紅の類を集めて此定性を行つた。集めた紅色素は洋紅、煮紅、品紅、紅子、紅粉の5種であつたが、之等は化粧用の外食物の色付け、玩具衣服の染色に用ふるものを含む。初めの4種は人畜に害無かつたが最後の紅粉なる色素は大阪にて製造し、哈爾濱より發賣して居る衣服染用の極めて有毒なる色素であつたが、價廉なので不正なる地方商人が、これを農民に賣つて口紅類紅用に用ひしめた。克山地方は殊に化粧に紅を奪ひ、殊に祭禮等には甚しく用ゆと。斯かる譯で此有毒紅の化粧に依る中毒と疑はれたので、犬、猫、兎、鼠等の動物に嘗めさせ實驗せるに、僅に2g位を20日位かかりて吸収させても、心臟病にて死亡する。解剖の結果は人に於けると同様なる Endomyocarditis alterativa eosinophilia simplex であつた。斯かる理由で氏は克山病の原因として毒物色素の中毒に依るものあるを主張して居る。男子及び子供に稀に来るは接吻の風習に依る移行であると。

「カシン・ベツク氏病」

哈爾濱市立病院にて本患者を供體された、同病

院では新進學徒中西眞吉氏が深く研究して居た。本病は初めて露の軍醫カシンに依つてバイカル湖附近の谿谷に發見報告され、後同じくベツクに依り研究されて名がつけられた。滿洲國では濱江省、間島省、牡丹江省方面迄汎布され、集落して地方病を爲して居る。病状は3—9歳頃起るが、直接の



「カシンベツク氏病」患者
(哈爾濱市立病院にて)

原因は猶ほ不明である、上肢、下肢の長骨の化骨(Ossification)が病的に早く起り、發育が止まる、關節は肥大する。初期は疼痛を伴ふと云ふ、後期には反つて骨質の脱却を來し、體重の爲め下肢彎曲し「オーバイン」の狀を呈する。素質の遺傳が親子に來ることがある、智能はあまり犯されず、血液中の赤血球、白血球及び他の細胞成分増加す、性器も尋常である。供養の患者は年齢18歳なるも身長僅に105cm 5歳位の小兒の如くであつた。歩く際に突出た臀部を左右に振つて歩くを特有とすると。

甲状腺腫

極めて高度の甲状腺腫が熱河省の各地に來る、女子に多く男子に尠い、予が訪問した承德陸軍病院の調査に依れば中等學校生徒で男子には尠いが

女子では女學校では軽度のもの多く見られたと、症状は甲状腺腫以外「バセドウ氏病」に於ける様な諸種の合併症状が見られない。原因は飲料水、飲食中物中の沃度の缺乏に依ると云はれ、水中に沃度尠き地方にて食用に沃度に乏しき岩鹽を用ふる地方が比較的多い。支那では蒙古國境山西省の方に多い熱河全省の各兵站地で患者數と飲料水中の沃度とを調査し、其の因果關係を調べたるに左表の如く沃度尠き地方に反對に患者の發生多きを見たと云ふ。

地名	患者數(高森教授)	水1L.中のmg沃度
平泉	19.5%	0.81
古北口	56.2%	2.69
承德	45.7%	1.78
凌源	35.5%	5.72
赤峰	13.1%	7.55

白羽病

熱河地方に見られる夏期極めて微細なるウツカ様の蟲、窓口に張れる金網を通過して燈火に集まり、人にては顔面手先等の露出部を刺す、特異性があつて少しも感ぜざる者あるも、人に依つては皮膚著しき痒感を伴ひ甚しく腫脹し水泡を作ることがあると云ふ。

「カラザール病」

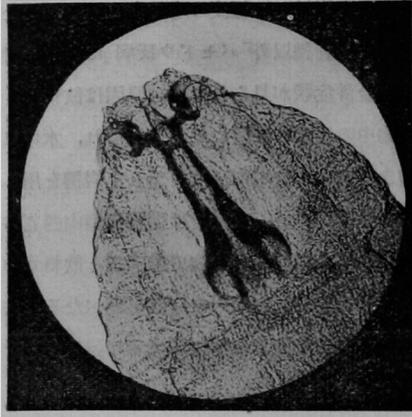
南滿洲の海岸地方にあり子供を犯し脾臓の腫大を來す。

序に蒙古地方に見らるる人眼蠅蛆症の事を記すと。

蒙古に於ける眼蠅蛆症

蠅蛆が體の自然孔例へば鼻、口腔、眼、耳等の粘膜若くは外傷創に寄生し、時に深部に侵入し甚しき時は死を來すことがある、これを蠅蛆症(Myiasis)と稱し、本邦内地には見られぬが蒙古、ロシア、歐洲等の大陸遊牧地方には見られることが稀で無いと云ふ。

蠅蛆症を發せしむる蠅には文獻上次ぎの如きものが擧げられて居る。



蒙古蠅蛆症を惹起する羊蠅の幼蟲頭部擴大圖（北野氏）

1. 牛蠅 *Hypoderma bovis*

チエコスロバキア、ノールウエー、西及び南アフリカ、ブラジル等の諸地方にあり、眼球内蠅蛆症も稀に起すが多くは眼球外蠅蛆症を發すると云ふ。

2. 羊蠅 *Oestrus ovis*

前者と同じ牛蠅科に屬するも稍々前者と異なるフランス、ブルガリヤ、アフリカ等の地方に多く、羊、山羊等の鼻孔内に幼蟲を胎生し、蠅蛆は鼻腔咽喉、前頭竇等に入り動物を罹患し時に死を致す、人を侵し殊に眼蠅蛆症を發する事がある。

3. 馬蠅 *Rhinoestrus purpureus*

ハンガリー、イタリア、オーストリア、小アジア、セネガル、ロシア、蒙古地方に住む幼蟲は馬、騾馬等の鼻腔、咽喉等に寄生し、稀に他の家畜人等にも來る。

4. 肉蠅 *Sarcophaga carnaria*

腐肉に附く蠅の1種で人眼に産蛆し、眼蠅蛆症を起すことがあると報告されて居る。

5. 「ザルコフアガ」 *Sarcophaga magnifica* (*Wohlfaltia magnifica*)

獨逸、フランス、ハンガリー、イタリア、ベルシヤ、小アジア、エヂプト、ロシア（亞細亞 ロシア）、蒙古等に産する、宿主は馬、騾、驢、牛、羊、山羊及び人であつて、人では夏期に鼻、耳、口其

の他創傷部に胎生蛆を生みつけ動物では猶ほ瀉門、尿道、蹄冠等にも産すると云ふ。人眼には眼に入り、内及び外眼蠅蛆症を發すると云ふ。單に蠅蛆症を起すものは他にもあるが眼を犯すものは大體以上の如き種類である。

眼より發見せらるる蛆の形も亦成蟲蠅の形も種類に依つて異なる所があるが人に於ける臨牀症状は概ね同様である。

蠅の活動し蛆を産するは、蒙古では陰曆5,6,7,8月の頃で、蠅が飛翔中動物の鼻に生むが、人に對しては故意か間違つてか突然眼を襲ひ瞬時に蛆を産みつけて逃げる、眼は急激に疼痛を覺え、1時間後には已に開眼し難きに至る。發病直後に於て既に數10匹の幼蛆が結膜囊に蠢動し、好んで角膜の周圍に集まり、鉤を以て茲に固着し、時に鞏角膜を穿孔して前房内に達することがある。蛆は長さ約1mm白色である。結膜は發赤し分泌多く腫胞を發する。

療法は強壓洗滌し或は「ピンセット」にて取り除き跡は結膜炎の治療を行ふ、蒙古人は嗅き煙草の粉を速かに眼に入れ幼蟲を殺すか或は新しい馬糞の汁を以て洗ふと云ふ。（此項文獻、善隣會調査月報、第52號、北野政次、軍醫團雜誌299號）。斯かる疾患の存在は蒙古地方に進出するもの注意すべき所であらう。

衛生技術廠を出てから新京陸軍病院を小笠原君の案内にて訪問し、院長伊吹中佐から限なく案内さる、滿洲國皇帝より御下賜の植物温室、將官病室等珍らしい。猶ほ竹内大佐及び細見大尉の神經接合手術、神經移植術に就ての業績を聴く。死後直ちに新鮮なる神經を採取し、銃創にて傷けられたる患者の神經幹を縫合するに、順當なる再生行はれて機能恢復するもの、既に70例に達したと云ふ。當病院には内科、外科の外眼科あり、下山忠典中佐の手術せる眼科患者數名居つた視神經の切斷、或は銃創性網膜炎の患者も居た。（未完）